

はじめの



ふたり展



豊前吉右衛門窯 永末修策さん みづ枝さん夫妻 30年の集大成

豊前吉右衛門窯(弁城)の永末修策さんと妻・みづ枝さんの作陶展が11月19日から7日間、小倉筒屋で開かれました。結婚以来、先代と夫をサポートし、地道に作陶を続けたみづ枝さんが夫婦生活30年の節目に初

出展。夫婦で初めての展覧会が実現しました。「絵は私よりうまいかな」と修策さんが言うように、みづ枝さんの趣深い作風には、過去に染織や柄を研究した経験おもしろが活かされています。新たな彩りを加えた豊前吉右衛門窯は来年、開窯60周年を迎えます。

↑「いい色がでたね」。窯出し後、作陶展用の新作を手を確認する永末さん夫妻。
↓みづ枝さんの染付による長皿(右)と修策さんの刻染付組皿(左)



修策さんが父から継承した「刻染付」は、先代吉右衛門氏が生み出した独自の技法。細かい紋様を彫り、その線の溝に顔料を筆で入れて彩色する。熟練と感性が求められる匠の技。



開場直前の最終調整、結婚30年の節目となる夫婦初の作陶展に約3百点の作品が並んだ。

町長日誌

▼「福智町で有名なものは何ですか」と聞かれると、多くの人が「上野焼」と答えるのではないだろうか。▼その上野焼は、今から406年前の慶長7年に、当時の豊前小倉藩主だった細川忠興(千利休の高弟で茶人大名といわれた)が、李朝陶工・尊楷を招致し、上野の地で窯を開かせたのが始まりだとされている。以来時を刻んで、平成14年には開窯400年を迎え、いくつか記念の事業が行われた。中でも、尊楷の出身地とされる韓国泗川市とは、小学生を中心とした交流が現在も続いており、今後とも是非継続していきたいと思っている(残念ながら、今年度は先方の申し出により中止となった)。▼ところで、江戸時代には遠州七窯(遠州流茶道の開祖・小堀遠州の好みの茶器を作った窯)の一つに挙げられ、400年余の伝統を持つ上野焼ではあるが、認知度は歴史の重みと比例していないようだ。▼数年前、県内のデパートで、ある窯元の個展が開催されていたので、会場に足を運んだ時のことである。二階の総合案内で場所を確認すると、「そのウエノヤキ展は……です」という答えが返ってきた。即座に、「それは、アガノヤキと読みます」と訂正はしたのだが……。また、昨年10月に東京・日本橋で行った福智町特産品展示PRの際も、上野焼と書かれた幟を、ウエノヤキとしか読んでももらえなかったのである。▼確かに、尊楷の衣鉢を継ぎ、これまでに多くの優れた作品が生み出されている。しかし、私達も窯元も、現実をしっかりと受け止め、上野焼が天下に認めてもらえるよう、努力と工夫を重ねていかなければならないと思う。

浦田 弘二